

日 時：令和5年12月19日（火）10:00

場 所：市役所 政策会議室

出席者：市長、理事、政策推進室長、防災課長、秘書係長

取材者：東海新報社、朝日新聞社、読売新聞社、岩手日報社、河北新報社

（敬称略、順不同）

## ○ 議 事

### 1 大船渡記者クラブから

#### (1) 市長就任の1年の所感について

佐々木市長が就任されて最初の1年が終わるにあたり、就任後最も印象に残ったこと、記憶に残っていること、国家公務員から首長に転じて感じたことをそれぞれ教えてください。

市 長：

私が市長に就任してから1年経ち、1番強く記憶に残っていることは、今年6月の全国植樹祭におきまして、天皇皇后両陛下が陸前高田にいらっしゃってくださったことです。植樹祭は、長い時間をかけて準備をしたうえで、歓迎行事や植樹用の苗の育成など市民の方々が全体でこの植樹祭を盛り上げていただき、成功裏に終わりました。また、天皇皇后両陛下が市民の方々と直接触れ合い、励ましをされていた姿がとても心に残りましたし、感動いたしました。市民の方々からも本当に良かったという話を何度も伺いました。私にとっても大きな出来事だったと思っております。特に、最近、皇后陛下のお誕生日の記事が掲載されていましたが、陸前高田、大船渡などの市の名前も取り上げていただき、真の復興を願っておりますと被災地に心を寄せてくださる言葉が書いてあり、私としてもとても心から励まされた思いでありますし、市民のために、これから一生懸命に頑張ろうと思いを新たにしました。

また、様々な方からの陸前高田市に対する支援や励ましは、いつも心に残りますが、先週は川崎フロンターレの選手の方々に、天皇杯で優勝し非常にタイトなスケジュールのなか、市民との交流会や子どもたちとのサッカー教室を行っていただきました。震災から12年9か月以上経っていますが、そのような中でも引き続き本市へ思いを寄せ、支援していただき、改めてありがたいと思いました。先週は、名古屋市の副市長が来訪されましたが、今年は名古屋フィルハーモニー交響楽団のコンサートや本市の市立博物館でロダンの公開と、震災以降、これまで支援していただき、さらに、現在もこのような温かい支援をしてくださる名古屋市の方々に対してもとてもありがたいという思いであります。また、今年6月にはクレセントシティからも15名の方がいらっしゃいましたが、今も切れ目なく、様々な方々が励ましや交流に来ていただいていることを改めて思いました。

国家公務員から市長に転じて感じたことについて、東京の霞が関で仕事を

し、その中でも地方の転勤はいくつかありましたが、その時と比較すると、市の仕事は市民の方々と距離がとても近いと言いますか、本市のように規模が小さいからこそ様々な方と直接お話をしたり、会う機会を持てるのかと思います。市民の方々と市の職員が身近に交流しながら、市の行政を行っており、今までの国家公務員では体験できなかった市役所と市民との距離の近さはとても大切なことだと思いました。

読売新聞：

市長の1年目の自己評価はいかがでしょう。何%くらい達成できたという実感はありますか。

市長：

毎日、一生懸命に前に向かって進んでおり、まだ折り返し地点に到達していないため、点数としてはまだゼロかもしれませんという状況です。

(2) 新年度（令和6年度）予算について

現時点で注力しようと思っている施策について教えてください。市長選で掲げた公約や国の経済対策とどのように関連させていくかも、あわせてお示してください。

市長：

復興事業のハード事業が終わり、復興の段階が新しい段階に入っています。私としては、特に、陸前高田市の今後を担う子どもたち、若者の方や子育てしているお父さん、お母さんなどの教育や子育てという人材育成への取り組みは大事であり、これから重点的に力を入れる分野であると考えています。具体的に、来年度予算で何かという細かい検討はまだ持ち合わせていませんが、例えば、学校給食の無償化や給付型奨学金を今年から取り組み始めましたが、給付型奨学金は、2年度目以降にふるさと納税の財源で1人でも多くの学生を増やしたいという思いがあり、そのような面ではふるさと納税の制度も、これから返礼品の種類を増やすなど農林水産業の振興と合わせて、もっと魅力あるものにしていく取り組みも合わせてできればと考えております。もちろん、大学を卒業された若い方が陸前高田に戻ってくるためには、働く場が少ない状況のため、当市において働く場が1つでも増えるような取り組みもしていきたいと考えております。

東海新報：

昨日、今後の水産を考える会議のなかで、省人省力化が挙げられていましたが、新年度予算等で水産業の省人省力化に対して、今後の展開や考えをお聞かせください。

市 長：

水産業の省人省力化について、今回のカキ養殖の機械などで、省人省力化の機械開発に対する補正予算を計上しております。さらに、経済産業省のものづくり補助金を活用しながら取り組んでいます。本市の場合は、実際に現場に機械を開発する人がおり、陸前高田市に限らず、日本の沿岸漁業の省人省力化にとってもプラスになるような人材ですので、その方の能力を活かしていただくため、経済産業省とも連携し、陸前高田市も支援しました。その方が良い機械を開発できるように、期待しているところです。

河北新報：

予算規模について、大船渡市は、震災以前の規模を踏まえて、選択と集中をしていかないといけないという話がありましたが、陸前高田市としては、来年度の予算規模はどのようなお考えですか。

市 長

やはり震災復興の極めて大きなハード事業の規模からは全く違う次元に入っていますので、財政規模の小さい陸前高田市でも選択と集中を行わないといけないと考えております。そのなかでも、今後も施設の整備等で予算もかかりますので、他の事業は工夫や節約が必要となると思います。

河北新報：

どちらかと言うと、何かの事業をやめるとかではなく、工夫してその予算を段階的に減らしていくというイメージでしょうか。

市 長：

市長査定がこれからであり、来年度予算の詳細な内容を確認していないため、現時点での確な回答はできませんが、やはり財政基盤が潤沢ではない中では、当然、必要な予算はもちろん措置しますが、無駄は一切できないですし、より効率的な運営を常に心掛けないといけないという意識でおります。

河北新報：

あまり若い人が働く場がなく、そのような場を作りたいと伺いましたが、それは地元のなかで立ち上がってなのか、それとも、外から引っ張ってくるということでしょうか。

市 長：

これは、両方とも必要であると考えております。若い方々の起業を支援するのは、これから本市の活性化のためには極めて重要であります。さらに、本市ならではの海などの資源をPRし、企業に来てもらうこともとても大事ですので、これからそのような取り組みも常に心がけて行いたいと思っています。

河北新報：

起業支援は様々な形がありますが、具体的にどのような形が今の陸前高田に必要だと思われますか。

市長：

どのような会社を起業するかにもよりますが、例えば水産物をネット販売するために起業した会社がありますが、その会社が活躍できるような様々な機会の情報提供やサポートが必要だと思っております。起業する方々の望むものを可能な範囲で支援することが必要であると考えます。

(3) 大学誘致について

現状と今後の展望、また今後誘致を見据えたロードマップを作成するかどうかの考えをそれぞれ教えてください。

市長：

これまでグローバルキャンパスを展開している立教大学、岩手大学と意見交換はしておりますが、現時点で大学誘致というほどの具体的な見通しは手元にありません。私の思いとしては、日本の大学だけではなく、今、陸前高田市が持っている海外との繋がりを活用し、日本の学生が陸前高田市に来るとアジアでも上位の大学の授業が受けられたり、特定の企業と連携した授業が受けられたりするなど、もっと夢のあるような、特に、高田高校の国際化とも連携する形で、より国際的な大学との連携もできないかと考えております。

これは、具体的な見通しがあるわけではないですが、任期の4年間で大学が出来上がり、学生が集まるということではなく、少なくとも特定の大学と本市で調印式のような合意が得られるように努めていきます。市民の方々がワクワクするような取り組みを目指したいと考えています。

東海新報：

大学誘致について改めて確認ですが、今ある施設を最大限有効活用し、その施設で誘致を実現させたいという考えは変わらないでしょうか。

市長：

そもそも考えていたのが、施設を有効利用し、後世の子どもたちに負担をかけるようにしないということでしたが、そのような原則は今後も変わりません。少なくとも本市の財源で、大きい大学用の施設を建設し、「大学さん来てください」という考えは念頭に全くありませんが、例えば企業と大学がタイアップし、建物を建設するのであれば大歓迎ですし、いろんな可能性があっていいのかなと思います。

東海新報：

市長がこの4年間で道筋の目途をつけることは、当初からおっしゃっていましたが、いずれそうだとした場合、市民の皆さんは見通しを知りたいと思います。いつぐらいにどのような段階にあり、それが4年間でこのような道筋になるという具体的なイメージが湧けば、市民の方々も市長の考えを理解し

て、大歓迎する公約内容だと思っておりますので、そのためにも見通しをつけることは重要だと考えますが、そのあたりのお考えを聞かせてください。

市長：

1月に政策アドバイザーの会合をスタートする予定にしております。これまで、私の公約等の絡みでの取り組みは細々としていますが、ここで、有識者の方々に条件やアイデアを伺いながら、私が進めている中身を補完してくれるような形の会議にしたいと思っています。特に、大学の話は大学の客員教授の方もいらっしゃると思いますので、そのような方々から意見を聞きながら、引き続き取り組んでまいります。そのような状況ですので、今の時点で市民の方々に提示できるようなスケジュール感は持ち合わせておりません。

東海新報：

政策アドバイザーは市長や市のパイプを持ってすれば、とても強力な人たちだと思いますが、市民を巻き込むことも重要ではないでしょうか。大学誘致ぐらいの壮大なプロジェクトであれば、まちを挙げた機運の醸成のために、何より市民が一番重要であり、やはり市民と大学誘致に関する考えの共有が必要ではないかと思いますが、今後の市長のお考えをお答えいただけますか。

市長：

まさにおっしゃるとおりです。市のために実施する事業に対して、市民の皆さんの考えが一番大事なものだと思っております。一方で、現時点の何も無い状態ではなく、ある程度、皆さんに検討していただけるような段階でないと意見を伺うにも難しいと思っております。そのため、もう少し時間をかけて、様々なアイデアを踏まえて取り組みを精査していかないと、皆様に相談できないと思います。これからも様々な方に助言をいただきながら進めたいと考えてます。

読売新聞：

立教大学、岩手大学だけだとなかなか他所から新しい提案が入りにくい側面もあるかと思いますが、市長としては、その2大学に限らずに幅広く考えていらっしゃるのでしょうか。

市長：

立教大学や岩手大学の試みは、私立大学と国立大学が陸前高田市でそれぞれの授業を受講でき、両大学の学生が正規の単位を取れるというおもしろい取り組みです。規模は小さいかもしれませんが、今までにないような大学の取り組みになると思います。もちろん、その取り組みで終わりとは考えておりません。

#### (4) 高田高校のあり方について

議会の一般質問で「今後の方向性について早期に正式な案を固めたうえで、正式な検討作業に入りたい」と答弁がありましたが、案の示せる範囲での内

容と検討作業に入る時期を教えてください。

市長：

市政懇談会の場で、この高田高校に国際交流科や国際海洋科などを設けることについては、市民の方からとても夢がありますねとか、壮大な計画でとてもいいですねという意見は多く聞きました。私としては、市民の方々に歓迎される、支援していただける内容だと思っております。次の段階として、先進事例からお話を伺いながら、陸前高田市の地域として、この県立高校をこのような方向にしていきたいと県の教育委員会に提案することになると思います。方向性として、クレセントシティへの長期中期短期の留学をベースにした魅力ある高校を目指し、そのためにクレセントシティとの交流実績があるためぜひお願いしますという提案内容になるかと思えます。地元で唯一の県立高校ですので、地域として、これからも大切にするためにこうしてくださいという要望を挙げることとなりますので、そのような手続きを検討していくという状況です。

東海新報：

非常に応援したいと思う市民はいるのではないかと思いますし、クレセントシティも大歓迎するような話であると思えます。先ほど、先進事例からお話を伺うとのことでしたが、そこから検討作業に入ったという捉えでよろしいでしょうか。

市長：

先進事例では、意見を伺う協議会が設置されたと聞いていますので、そのような市民の方々から意見を伺うための会議を組織化することが重要であると考えております。

東海新報：

来年度にそのような市民から意見を伺うための協議会が立ち上がるイメージでしょうか。

市長：

できれば一日でも早く立ち上げたいですが、教育に係る内容は慎重な検討が必要になりますので、今年度中は難しいと思っています。その代わり、情報収集や意見交換は進めていきたいと考えています。

東海新報：

正式な検討作業は、来年度から入るという認識でよろしいでしょうか。

市長：

はい。

東海新報：

県教委に対して、高田高校の国際化の要望はいつ頃を見据えているのでしょうか。

市 長：

そのようなプロセス自体を具体的にまだ把握できていないので、今後、情報収集しながら、検討していきたいと思います。

読売新聞：

高田高校において、山村留学の海外版みたいなものは考えていらっしゃいますか。

市 長：

もし、今のイメージで高田高校がそのような形になれば、他の地域の生徒にとっても、魅力のある高校になると思います。外から生徒が来てくれることはとてもいいことですし、市の活性化にも繋がると考えております。

河北新報：

国際化について、協議会に諮る段階では国際化の科目を諮るのか、それとも高田高校にこのような科があればいいよねという形で諮るのでしょうか。様々な作り方がありますが、例えば、ゼロベースで協議会に提案し、今の時代は半導体だから工学科を作りましょうという意見が出る可能性もあるとは思いますが、国際化を大前提とするのでしょうか。

市 長：

他のまちにはなく、陸前高田市だけが持つ財産がクレセントシティとの深い絆だと思いますので、そのようなところを伸ばし、さらに今後、日本社会が望むような人材を輩出できるような高校にしたいと考えています。具体的にクレセントシティに1年ぐらい留学して、帰ってくる頃には日常会話やコミュニケーションができ、いづどこに出しても仕事できるような生徒を教育できる高校にしていきたいと考えています。

河北新報：

クレセントシティに限らず、シンガポールとの関係についてはどのように考えていますか。

市 長：

時差があまりないことから、リアルタイムでオンライン授業を考えています。シンガポールとの関係も陸前高田市が、他のまちにはない財産であるため、最大限活用したいと考えています。

河北新報：

リモートでの活用のイメージが強いということでしょうか。

市 長：

私の場合はそう考えていますが、専門家の方の意見聞いたらもっと違う展開になるかもしれません。